

87 誌上発表 『奇疾便覧』に引用される症例について

周防 一平, 小曾戸 洋

北里大学東洋医学総合研究所

【諸言】『奇疾便覧』は、下津寿泉（生没年不詳）撰著、正徳5年（1715）刊、全5巻からなり、医書、史書、小説、類書、随筆等、132種の書物より奇疾、奇病に関する記述を摘録、編集したものである。下津春抱（生没年不詳）の序に「之を書するに国字を以し」とあるように、本文は漢字片仮名交じりの平易な文で書かれている（ちなみに、『国書人名辞典』では、下津寿泉、下津春抱は同一人物とされているが、本書の序には「家第寿泉」と記されており、二人が兄弟であることが示唆される）。安永3年（1774）に『怪妖故事談』として改刻された修印本もある。本書で引用される症例はその性質上、怪異譚とみなされることが多く、ほとんど先行研究は見当たらない。そこで本書の性格を明らかにするため、引用された症例について調査することとした。

【方法】『奇疾便覧』に引用される、症例総数、治療法の記された症例数（治療の結果死亡したものは含まない）を集計した。なお、寿泉による注に含まれる症例は今回の調査対象から除外した。

【結果】病題172、症例総数277、治療法の記された症例数201で72.6%（小数点第一位以下四捨五入、以下同様）であった。治療法の内訳は、1疾患に対する複数の治療法組み合わせによる重複を含め、総数222、湯液163（73.4%）、外科処置19（8.6%）、鍼治療4（1.8%）、灸治療3（1.4%）、その他33（14.9%）となっていた。

【考察】『奇疾便覧』は、本文が漢字片仮名交じりであることもあり、当時の怪談ブームに合わせ、『怪妖故事談』と改題再版し、医家のみではなく広く一般向けに怪異譚集としても売り出されたという。和文で記され、その引用元も明らかであることから、読本作者の種本としても用いられていたようである（播本眞一『『怪物輿論』と『奇疾便覧』より）。このような背景もあり、本書についての先行研究は、国文学の分野で、文化的な面での影響についての考察がわずかに見られるのみであった。しかし、『奇疾便覧』に記載された症例のうち、72.6%にその治療法が記載されていることから、単に奇疾、奇病の類を紹介するためだけに編集されたものでないことがわかる。

治療法の内訳として比較的外科処置の割合が高いのは、瘡、癰、癩、疔といったものが奇疾として取り上げられているケースが多いからであろう。治療法のうち73.4%を占める湯液による治療も、数例を除き処方が記されている。さらに、寿泉による注として、処方の詳細、別処方、病態解説が、医書、本草書等を引用し、付されている。以上のことから、寿泉は奇疾、奇病の紹介にとどまらず、対処法までを記した症例集として本書を編集しようとしたという意図がうかがわれる。

以上のことから、寿泉の意に反し、後世書肆により怪異譚集の性格を強調し再版された影響が今日まで続いているともいえる。

【結論】『奇疾便覧』は、元来、奇疾、奇病の対処方をまとめた症例集をとして編集されたが、時代背景により怪異譚集としての側面が強調され、その影響今に至っていると考えられる。

（本発表は、武田科学振興財団、2014年度杏雨書屋研究奨励「下津寿泉と『奇疾便覧（怪妖故事談）』の研究」による研究成果の一部である。）